HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	行刑施設とそれが置かれる地域との関係性 : 北海道での取り組みを例として [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	横田, 勉
Citation	北海道大学. 博士(国際広報メディア) 甲第11561号
Issue Date	2014-09-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/57177
Rights(URL)	http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Tsutomu_Yokota_review.pdf (「審査の要旨」)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（国際広報メディア）　　氏名：横田　勉

審査委員	主査	准教授	堀田　真紀子
	副査	教授	西山　徳明
	副査	准教授	西村　龍一

学位論文題名

行刑施設とそれが置かれる地域との関係性

―北海道での取り組みを例として―

本論は、民営化の是非、再犯率の高さ、収容能力の限界など、問題が山積する行刑施設について、それが置かれた地域との関係を再考することで、時代、社会状況に即した、新たな姿を探ろうとするものである。その際、筆者がとくに参照するのは、地域そのものの形成が、囚人と不可分にすすんできた北海道に見られる行刑施設と地域との関係である。開拓期の北海道では、厳しい環境の中、辺境を生きるもの特有の連帯感や、囚人労働による物理的設備の必要性から、住民と施設の間に、包摂的な関係が培われていた。生活が安定し豊かになるにつれ，この関係も様相を変えはじめ、とくに戦後は、日本の他の地域と同様、迷惑施設としての排除的な関係が支配的になる。とはいえ、今日、その振り子も一巡りして、人権意識の高まりや、先述した山積する問題解決のために、行刑施設が地域とふたたび包摂的な関係を結ぶことが再び求められている。そのあるべき姿について、北海道の行刑施設の歴史や現在なお受け継がれるその伝統に学べるのではないかという問題意識の下、行われたのが本研究である。そのために筆者は刑罰が組織的に行われ始めた江戸時代の中央と松前藩の比較的考察からはじめ、明治時代の行刑体制の近代化、開拓政策から今日にいたる行刑施設の歴史を、地域住民との関係に焦点をあてながら、周到に明らかにしていく。とくに道内６つの主要行刑施設について、それぞれの地域の特質を顧慮しながらその歴史的な形成の中で施設が果たしてきた役割などについて、関連職員や市民活動家などに対して行った聞き取りや、古地図や議事録資料分析などをベースにした網羅的な調査は、高く評価すべきである。その後、こうした緻密な実証を基盤に、北海道の行刑施設が地域住民と今日にいたるまで取り結んできた包摂・排除の力学関係のあらましが分析される様子も、説得力のあるものになっている。そこで抽出された可能性や問題点は、最終章において、今後あるべき行刑施設と地域との関係についての提言にまとめあげられており、

この部分が本論の中でも挑戦的な部分になっている。犯罪者の矯正、社会復帰支援のために地域のさまざまな支援団体といったリソースとの連携をはかると同時に、農業の人材不足など，地域が抱える解決のために寄与する開かれた行刑施設のあり方が提案されており、大変興味深いものになっているが、イギリスのコミュニティプリズンなどの先駆的な例の紹介に逃げているところがあり、それまで全論文でなされてきた議論の成果をフル活用したヴィジョンを示すところまでいたっているとはいえない。しかしそれも、この論文の問題の射程が、それだけスケールが大きかったせいでもあり、この欠点を顧慮しても、北海道大学大学院の博士号のレベルには十分に達しているということで、審査委員全員の意見が一致した。